

「式辞」

記録的な寒波が繰り返しあとずれた厳しい冬が過ぎ、ようやく春の温もりが感じられる3月、このよき日に、晴れの門出を迎えた3年生の皆さん、ご卒業本当におめでとうございます。

(卒業生に礼)

まず初めに、ご来賓の方々にご挨拶を申しあげます。本日ここに、第七一回卒業式を挙行いたしましたところ、公私何かとご多用の中を、多数の皆様方にご臨席賜り、卒業生の前途をお祝いくださいまして、誠にありがとうございます。また、平素より本校の教育活動に深いご理解と多大なるご支援を賜りまして、重ねて心より厚く御礼申しあげます。「ありがとうございます。」

さて、今ここで義務教育9年間の修了を意味する卒業証書を授与された71期生の皆さん、

今日からは、この伝統ある矢田中学校の卒業生

として誇りを持って歩んで行つてください。君たちが生きていくこれからの中を思うとき、7年前の東日本大震災の教訓を改めて考えてみたいと思います。震災では多くの命が失われ、失われた命の数だけ多くの教訓が私たちに残されました。自分を守ること、家族や友とのつながり、地域の絆など、「命」を守るために何が大切か、多くの教えがそこにありました。矢田中学校では、3年間を通して地域とともに命を守る「防災学習」を積み上げてきました。その学びは、今後必ずやって来る、「南海トラフ大地震」で、君たちや君たちの大切な人を守るために役立つことでしょう。また、「いじめ」や「差別」を許さない取組として学んだ「人権学習」は、これからの中社会で、人と人をつなぐ大切な役割を担う人材として、君たちを生かして行くでしょう。多くの仕事がAIや、ロボットが担う時代になつても、人を思いやることによつて生ま

れる「人間」の営みは絶えることはないのです。卒業に際し矢田中学校での学びをもう一度、自らのものとして確認しておいてください。

先生は、昨年4月に着任し、君たちは約1年の時を共に過ごしました。その間、修学旅行や体育大会、文化祭などの様々な行事で君たちの活躍と成長に触れ、大きな喜びを感じました。朝の正門でのあいさつでは、大きな声と優しい笑顔を返してくれました。毎週の全校集会では、真ん前で先生の話に真剣に耳を傾けてくれました。時には校長室に様々な相談に来てくれる人もいました。そのすべてが先生にとつて素晴らしい思い出となっています。「ありがとうございます」といいました。

お別れに際して、20世紀最大の天才科学者といわれた、アルベルト・aignシュタインの言葉を送りたいと思います。それは「天才とは、努力する凡才のことである。」という言葉です。

冬季オリンピックフィギュアスケート女子で金メダルに輝いたザギトワ選手や、史上最年少で6段に昇格した将棋の藤井聰太さんも、同じ15歳の少年少女なのです。ただそれぞれの道で、多くの努力を積み上げてきた結果として、天才と呼ばれているのです。君たちは今、無限の可能性を抱いてここに存在していると先生は思っています。自分をあきらめることなく最後まで努力を続ける人に、必ず道は開けます。頑張つてください。「過去に学び、今のために生き、未来に対し希望を持つ。」君たちの明日に幸多かれ！「ご卒業おめでとうござります。」

最後になりましたが、卒業生の保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。人生で最も多感で、しかも著しい成長期にあるお子様が卒業証書を受け取られた姿をご覧になり、幼かつた頃のことを思い出され、立派に成長した姿に感慨もひとしおかと、ご推察申しあげます。お

子様たちは、この三年間で人の気持ちを思いやれる立派な人間に成長したと確信しております。表現が下手な子もいるとは思いますが、ここまで育ててくれた保護者の皆様への感謝の気持ちは、どこの中学生にも負けないと思います。そんな熱い気持ちを今しつかりと受け止めてあげてください。また、この3年間、本校のために多大なるご支援、ご協力を賜り、全教職員になり代わりまして、あらためて厚くお礼申しあげます。「ありがとうございました。」（礼）

では、卒業生の皆さん。健康に十分注意して、矢田中学校での三年間を誇りとし、大いに活躍されますよう、心よりお祈りして、「式辞」といたします。これからも思いやりの心を持ち、それぞれの道で頑張つていってください。

平成30年3月14日

大阪市立矢田中学校長 西川 祐功